

The pollinators on the flower of *Saururus chinensis* were observed beside the Biruda-pond in Itakura-machi, Gunma Pref. The flower is composed of 6(-7) stamens and one pistil with 4(-5) styles. Though the flowers have no nectary and smell sweet slightly, they do not show feature of anemophilous or automatical self-pollination. Thirteen species visited the racemes to take the pollen as shown in Table 1 and 2. Form these observations the flowers of *S. chinensis* seem to be entomophilous mainly pollinated by syrphids.

(東京都練馬区 〇〇〇〇 176)

□雲南植物研究所：雲南植物誌 I, 870 pp. (1977 X) および II, 889 pp. (1979 III). 科学出版社, 北京. 各 ¥4,000. 雲南省はヒマラヤと台湾との中間にあり, その面積はほぼ日本全土に匹敵し, 内陸省ではあるが数百米の低地から 4500 m に及ぶ山地を含んでいて, そのフロラは台湾及び日本のフロラの成因と関連とにおいて重要な関心がよせられるものであった。今回出版されたのをみると, それは分類の順ではなく, 研究がすんだ科から発表されていて, 第一巻で28科, 第二巻で22科を扱っている。小さな科もあればシソ科やブナ科のような種類の多い科もある。少しくってみるとキビノヒトリシズカやトキワマンサクやマイズルテンナンショウが載っているかと思えば *Mecopnopsis* が16種も挙っていたり, *Rafflesia* に近い寄生花 *Sapria himalayana* やヤッコソウの一種 *Mitrastemon cochinchinensis* が生えていたりする。まことに絢爛多彩であり, 我々に探求の意慾をそそることしきりである。折から雲南採集行の計画あるやにきく。植物誌の出版をこいねがうと共に, 採集行の成就を願うや切なるものがある。

(前川文夫)

□台湾植物誌編輯委員会編著：台湾植物誌 第5巻 Flora of Taiwan vol. 5. 1166 pp. 389 pls. 1978 IX. 現代関係出版社, 台北. 待望の单子葉類の部が出版された。イネ科412ページを許建昌博士, ラン科280ページを劉裳瑞, 蘇鴻傑の両博士, カヤツリグサ科を小山鉄夫博士が担当し, 中々重要な見解を提出し, 詳細な解説をしている。これで第1巻からしめて5巻, 4077ページで1653図を加えて, 台湾のフロラを現時点で明らかにした点は大きい。早田文蔵博士による初期の解明が第一期とすれば, これは正に第二期の編著であって, 中にはいまだしの科もあるけれども, これを大成したことはまことに偉大であり, 喜ばしいことである。やがて第6巻として, 引用文献や索引をこめたものが出版される筈であるが, フロラとしての完成は本巻を以てなしとげられたということができよう。

(前川文夫)